2

2010.6.23

社会学者の仕事の社会的影響
―リアリストは嫌われる？

山田 昌弘
やまだ まさひろ
中央大学文学部 教授

山田昌弘
やまだまさひろ

中央大学文学部教授
専門：家族社会学・若者論

1957 年生まれ.
1986 年東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学.
主要著書として『なぜ若者は保守化するのか―反転する現実と願望』
（2009 年，東洋経済新報社）、
『「婚活」時代』（2008 年，ディスカヴァー携書）、
『少子社会日本』（2007 年，岩波新書）.

▶司会　皆さん、こんにちは。

それでは、定刻になりましたので、ただいまより、関西学院大学社会学部創設50周年記念連続学術講演会／シンポジウムの本日は第2回になりますが、中央大学文学部教授の山田昌弘先生に「社会学者の役割の社会的影響―リアリストは嫌われる」という題でご講演をいただきたいと思います。

今日の進め方ですけれども、最初に社会学部長の宮原浩二郎から挨拶をさせていただきまして、その後、山田先生からのご講演が大体60分とお聞きしております。その後、フロアの方からの質問を受けて質疑応答の時間を、10分から15分とりたいと思っておりますので、皆さんその際にはぜひ積極的に質問していただければと思っております。

なお、今日の講演会に際してましては、情報保障としまして、手話通訳として、森川まなみさん、古賀一江さん、鞍冨美樹さんの3名の方が手話通訳をしていただきます。それと、関西学院大学キャンパス自立支援課のほうから、学部生の森本舞さん、田中翼さんのお二人が、講演内容をパソコンテイクしていただくことになっておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

それでは早速、最初に社会学部長宮原浩二郎から、今回、第2回の講演会開催に当たって挨拶をさせていただきたいと思います。

▶宮原浩二郎　皆さん、こんにちは。今日は関西学院大学社会学部50周年の記念の講演会に来ていただきまして、ありがとうございます。

この社会学部ということなのですけれども、意外にあれなのですね、社会学をやっている人はわかるのですが、世間一般の人から「社会学って何してるの？」という質問をよく受けます。例えば、僕は先週の土曜日に関学の後援会という学生の父母、保証人の方々の集まりに出させてもらったのですけれども、そこでテーブルで7～8人の父母の方々と話をしていて、結局、最後は「社会学って何するんでしょうか？」という質問になりました。それで、世の中の仕組みを研究するのですとか、いろいろその場を取り繕ったのですが、なかなか難しい。それを考えると、今回お越しいただいた山田昌弘先生は、恐らく社会学者のなかで、そういう社会学とは社会的に何であるかについて、最も熟達して語れる数少ない研究者の一人であると思います。

少しつけ加えますと、そのときのお話でも、父母の方々から、自分の子どもたちはとても楽しんで授業を受けていると。例えば1年生の子供さんを持っている親の方が、毎日毎日、授業が楽しくて仕方ないと言っているというお話もあって、うれしくなりました。しかし、同時に社会学がこの社会のなかでどういう役割を果たし、その社会的インパクトと言いますか、どういう効用を持っているかについて、改めてそれを考えることは大事なことなの

で、今回の講師として大変すばらしい先生をお呼びできたことをうれしく思います。

では、山田先生よろしくお願いいたします。

▶司会　ありがとうございました。ごく簡単に私のほうから、今日の講師の山田昌弘先生について紹介させていただきます。

皆さんご存知のように、山田先生は非常に活躍されておられ、さまざまな本、例えば少しピックアップするだけでも、『パラサイト・シングルの時代』（1999 年、筑摩書房）、『希望格差社会』（2004 年、筑摩書房）、『なぜ若者は保守化するのか』（2009 年、東洋経済新報社）、そして最新では編著として『婚活現象の社会学』（2010 年、東洋経済新報社）というように、今、宮原学部長からありましたように、社会学者の世界だけでなく、より一般の人々も知るところとなる「パラサイト・シングル」であるとか、「婚活」であるとか、その時代の変化、時代の最先端の流れを的確に社会学の言葉でとらえ、その観点から社会へ提言されていくという。そういう活動をされてきた山田先生のご活躍は、皆さんもすでに十分にご存知のことと思います。

今日は「社会学者の仕事の社会的な影響―リアリストは嫌われる？」というタイトルでご講演をしていただきます。一連の連続講演会／シンポジウムの共通テーマとして「大学教育としての社会学」を掲げております。それに照らして言えば、本日は山田先生の方から、リアリストとして社会学者が社会に切り込んでいくと、どうして嫌われるのか。そのときにアイデアリスト＝理想論者でいればいいのかといえば、いやそうではないだろう。そうした論点についてお話が聞けるかと期待しております。

このことは、まさに今、私たちが直面している、社会学教育とはどういうものかということにつながります。いたずらに理想だけを学生に教えることでは当然立ち行きませんし、だからと言って、今ある社会をただ単に肯定していくだけでは社会学の意味はない。そういうことを考えたときに、では、本当の意味で現実をきちんと見据えて、そのうえで、どのような社会構想が可能なのか、どういう政策提言が可能なのか。皆さんご存知のように、山田先生は各種の政府関係の審議会の委員等を務めておられますので、そういう意味でも、社会学が、今、社会のなかでどのような期待を受けているのか。そして、関学の場合であれば、この 50 年どういうことをなし得てきたのか。そして今、どういうことが社会学にできるのか。社会学にかかわる私たち各々がそのことを考えていくうえで、貴重なお話が聞けるかと思います。

前置きが長くなりましたが、山田先生のほうからご講演よろしくお願いします。

▶山田昌弘　こんにちは。

雨の中、お越しいただきまして、どうもあ

りがとうございます。社会学部50周年ということで、どうもおめでとうございます。私も52歳です。ことし53歳になる52歳ですので、大体、私が生まれて少したったらできたということで。何かそれが記念となると、私も歳をとったなと思う次第でございます。

ご紹介にあずかりましたが、関学は久しぶりなのですけれども。少し前に、関西のある大学で、そこで経済学者の人に招かれて講演したときに、パラサイト・シングルがどうこうという話をしたら、いきなり、「当たりましたな、先生」とか言われてしまって、さすが関西だと思いました。

そういう意味で、親と同居する未婚者、パラサイト・シングルですね。今まで独身者といったら、一人暮らしだと思われていたものを、いろいろ調査をしてみるとそうではない。日本では独身者といえば、ほとんどの人が学卒後も親と同居している。まるで親に寄生しているみたいだというので、「パラサイト・シングル」を見つけ出したわけです。フリーター等を調査しているなかで、希望というものがなかなか持ちにくい世の中になっているというので、「希望格差社会」という言葉をつくらせていただきましたし、さらに、結婚をまるで就活　―就活という言葉も1990年ごろにつくられたのですけれども―、就活と同じように結婚に向けての活動を目的意識を持ってやらないと、なかなかできるものじゃないというので、「婚活」という言葉をつくらさせていただいたのです。

でも、何か歳のせいか、私、すごく最近愚痴っぽくなってきまして、なかなか真意が伝わらないところがありまして。「パラサイト・シングル」と言うと、まずすぐ匿名の手紙がぱっと来るわけです。今では、匿名の手紙は、私は自分で開封せずに、アルバイトの秘書に開けさせて、私が読んでいいか、読まないかを決めさせて、嫌なやつは読まない、そのまま捨ててしまうのですけれども。昔は、『パラサイト・シングルの時代』を書いた当時は、アルバイトの人もいませんので、開けて見たら、「親が裕福な者は、楽に暮らして当たり前だ。親が貧しい者は、一生貧乏で当たり前だ。パラサイト・シングルなどというのは、おまえが貧しいところに生まれたから言うんだろう」という手紙も来たことがあります。さらに、「パラサイト・シングルというのは、とにかくブランド物を買って遊んでいるのをパラサイト・シングルというのでしょう」と、―そう言わないこともないのですけれども―といった誤解も生じました。私が言いたかったのは、親と同居していることで、なかなか結婚ができにくい、外に飛び出せなくなる、しにくくなるということを言いたかったのです。さらに最近は、収入は少なくても親と同居しているおかげで暮らせてしまうところがあるわけです。

だから、私、数年前にフランスの経営大学院の日本視察団の人たちと懇談を持ったこと

があるのですが、やたら日本の若者の非正規雇用者、低収入者の様子を聞きたがるのですね。「最低賃金は幾らぐらいか？」と聞いてきたので、大体、当時、ユーロは高かったですから、「4 ユーロぐらいだ」と答えると、「それでどうして暮らせるんだ？」と聞いてくるわけです。「何か若者向けの社会保障はあるのか、低賃金とか失業している若者たちに、政府はお金を出しているのか？」と聞くので、「いや、アルバイトの人とか、アルバイトで失業してしまった人には、政府は何にもしてくれません」と言ったら、「何で日本の若者は暴動やデモを起こさないんだ。フランスでそんな人が何百万人もいたら、政府が成り立たない、反乱を起こして成り立たないぞ」と言われました。そこで私は、「いや、日本では、私が「パラサイト・シングル」と名づけたのですけれども、低収入の若者とか無職の若者は、大体が親と同居していて、収入 100 万円でも収入 200 万円でも親が面倒見てくれて、海外旅行に行って、パリでエルメスとかヴィトンとか買ってますよ」と言ったら、「メルシー」とか言ってくれたのですけど、それはまあ、おいておきまして。

その後で言われたのは、「日本の経営者がうらやましい」と言うことです。学校を出て、日本語がちゃんと読み書きできる人を、時給 4 ユーロで雇って、文句も言わずデモもしない。これは日本企業にとっては、経営者天国ではないかみたいな話をしていたのですが。まさにそれも、社会構造と文化構造が異なれば、同じ非正規雇用者といっても、社会において出方は異なるということを言いたいのですが、最近、さっぱりだれも使ってくれなくなってしまいました。

「派遣切り」などがあったときでも、やたら派遣村とか工場で派遣切りをされてホームレス等になってしまった若年男性が注目を浴びましたけれども、実はその裏では、若年女性がやたら派遣切りに遭って失業しているわけです。でも、それは何ら社会問題として取り上げられることはない。つまり、欧米のように一人暮らしで失業してしまえば大変だけれども、親元に吸収されてしまえば余り大きく取り上げられることはない。でも、将来どうなるかといったら、これは問題になってくるわけです。

「婚活」もそうですね。婚活もいろいろ言われましたが、同じ社会学者の上野千鶴子さんから、「今どき結婚したいなんていうのは時代錯誤ですね」なんて言われてしまいました。そのように新聞に書かれてしまったのです。いや、でも「時代錯誤」と言われたって、大多数の人は結婚していて、大多数の人は結婚したいと思っているのだし、それは上野先生ぐらい有名で収入ある人だったら「おひとりさま」でも大丈夫だけれども、多くの人はなかなか「おひとりさま」として満足な生活を送れない。だって上野先生の『おひとりさまの老後』（2007 年、法研）を読むと、結婚

する方が楽なように思えてきますよね、逆に言えば。あんなに経済的な状況をそろえて、ネットワークも作って、コミュニケーション能力を磨いておひとりさまへ備えましょうというのですけど、だったら結婚したほうが楽だと思う人が、逆に増えてもおかしくはないのではないか、と思います。

あとは、いろいろ常識とは逆のロジックを発見するということを、私はしてきたと思います。なかなか、これも受け入れられないですね。私、15年ぐらい前から、少子化の原因について「子どもの数が少なくなった原因は未婚化にある」と言っていて、それも「男性が女性を、妻子を養うほど収入を稼げる若い男性が少なくなっているからだ」と言っているのですが、それがなかなか受け入れられない。そのことは人口学者の間では、もう1990年代から常識だったのですけど、マスコミや表に出てくる原因は、「働きたい女性が増えている。子どもを持っても働きたい女性が増えている」というものでした。そうした原因によって子どもの数が少なくなっているのだという公式見解を突き崩すのに、15年かかってしまいました。

だから、10年ぐらい前までは「収入が低い男性が結婚しにくい」ということを言いますと、「やめてくれ」と「これは載せないでくれ」と言ってくるのはまだましで、私がある県で調査を請け負いまして、年収の低い男性は結婚もしてないし、彼女もいない率が高いと10年ぐらい前に報告書に書いたら、もう有無を言わさず削除でした。だから「何で削除したのか」と聞いたら「収入の少ない男性への差別を助長する」と言われました。差別を助長すると言われても、それは事実だし、報告書だからいいのではないですかと言ったら、だめと言われました。そうやって、問題を隠ぺいして、口当たりのいいことだけ言っていればよかったのでしょうね、当初は。

しかし、さすがに最近はもうこらえきれなくなったようで、今年、内閣府のほうで「どうやって人は結婚するのだろう」ということに関する調査をやることになって、私が主査になります。逆に言えば、今までどうやって人は結婚まで持ち込むのかを、全く調査等もせずに政策が行われていたということです。ある経済学者が新聞に「保育所をつくれば結

婚が増える」と書いていました。統計的に言えば、保育所がたくさんあるところは未婚率が低い。だから、保育所をつくればみんな結婚するはずだ。社会学的に言えば、そうした議論は馬鹿げています。でも、そういう数字があるのです。つまりこういうことです。保育所ができれば、仕事をして子どもを産みたいと思っている女性が、結婚しても大丈夫だからといって結婚するようになる。

私、いつもこれを「人間はマリア様じゃない」と言うのです。子どもを産みたいと思えば産めるわけではないということを、よく言います。カトリックの国のスペインの学会でそうした話をしたら、一応沸きました。女性はマリア様じゃないのだから、男性なしで子どもは産めないでしょう、と。日本は結婚してない人が多いだけではなくて、彼氏がいない女性、―彼氏がいない女性が多ければ彼女がいない男性も多いから、それはどちらもそうなのですけれども―、彼氏がいない女性が三分の二くらいになるわけですから、さあ、保育所ができた、子どもを産んでも構わないと思ったところで、相手を見つけなければいけない。この点について、あまり何も考えてないのかなと思いました。

私は右からも左からも攻撃されます。済みません、何かさっきからずっと愚痴をこぼして 15 分が経過してしまいました。最近、いろんなところで専業主婦志向が若年女性で増えているというデータが出てきています。あるフェミニストの人に、「山田さん、お願いだから言わないでくれる」と言われたのです。「言わないでくれると言っても、事実じゃないですかと」言ったら、「いや、せっかくここまで来たのに」と言われたのですが。

でも、この前の国立社会保障・人口問題研究所の調査結果でも、結婚している人の中で若い女性ほど「夫は仕事、妻は家事」という考え方に賛成する割合が現実に増えてきているわけです。大体、私たち、大学の先生の間でも、学生に専業主婦志向が増えているという実感ですよね。

いろいろほかにもありますけれども、何でこんなに受け入れられないのだろうということを常々思っているわけです。結局は、多くの普通の人々にとって、―多くの社会学者ではなく、社会学者もそうかもしれませんけれども―、どうも社会学というのは、そもそも、なかなか社会に受け入れられないことが宿命づけられているのではないか、と思うようになりました。

これは、配布した資料の「塩野七生の世界

元老院倒した『改革者』今に重なる」からの引用です。これは 1996 年のものです。逆に言えば、日本は 15 年間、何をしてきたのかという問題と重なるわけですけれども。

「多くの人は、自分が見たいと欲するものしか見ない」

訳し方によって異なりますが、私は簡単に「人は自分の見たいものしか見ない」と言う言葉が好きです。2000年前にユリウス・カエサルは、そのように言ったわけです。

社会学というのは、そもそも現実をありのままに見ようとする。私も30年前に初めて社会学の授業を受けたのが、元東大教授の見田宗介先生だったのですが、見田宗介先生は常にそれを強調なさっていました。とにかく、偏見や常識をわきにおいて、ありのままに現実を見てみると浮かんでくることがありますよ、ということを繰り返し繰り返し述べられたわけです。となると、この二つを合わせるとどうなるかというと、社会学というのは、人が見たくないと思っている社会の側面を見せてしまう学問ではないか、と。これは嫌われるよね、と思いました。まあ、たとえ嫌われても、嫌われると思っても、言わなきゃいけないと思うのが、この社会学者だと私は思っているわけですけれども。

特に、家族の分野だと嫌われるわけです。政治とかそういうところをやっていれば、まだよかったのかもしれません。特に家族の分野は、いろんな意味で「原理主義的な人」は多く存在しているわけです。特に、原理主義的な人は家族をターゲットにしている人が多い。だから、夫婦別姓について、ちょっとでもそれを、―選択的ですよ、別に全部別姓にしろというわけではない―、選択的であろうが何であろうが、夫婦別姓について一言口にしたり書いただけで、ごうごうたる非難がいろんなところから来るわけです。

だから、左右両方から攻撃が来るというのはそういう意味です。「婚活」ということを言うと「結婚したくない人まで結婚させるのか！」と、いわゆる昔の「左」からの―「昔の左」と言っちゃいけないのかしら―そういう人たちからの非難が来ます。明日は男女共同参画講演会として兵庫県庁で講演するのですが、そこには「婚活はけしからん！」という人からの、何でこんな講演会を開くのだという文句が来たそうです。「結婚したくない人の権利を侵すのか！」みたいな批判が来たわけです。夫婦別姓を言うと、今度は「家族を壊すのか！」と。どっちがいいのだ、ということですよね。別に私、中立的に、家族や子供をつくりたい人はつくればいいし、つくりたくない人はつくらなくていい、と言っているのですけれど。

とにかく人間というのは、自分の意見と異なるライフスタイルをして幸せでいる人がいると、それが気にくわない。違うライフスタイルをとっている人が幸せを得ると、自分が不幸に思えてくるというところがあるらしく、社会学者というのは、そこを結構刺激してしまうのですね。

だから、夫婦別姓も何度も言っているのですが、社会学をやっている皆さんはご存知ですが、日本は伝統的にずっと夫婦別姓でした。1898年、日清戦争の少し後に、民法ができ

たときに、強制的に夫婦同姓にした。それは、日本の伝統ではなくて、キリスト教―ここはキリスト教の大学ですが―の伝統です。西洋のキリスト教国はどこも原則夫婦同姓だったので、夫婦別姓だと日本は野蛮に見られるから、強制的に同姓に変えてしまおうということで、夫婦同姓を強制したというのが本当のところです。

私、昔、講演していたときに、その話をしたら、髪の毛が短くて、刈り上げていて、かっぷくのいいおじさんがつかつか近づいてきて、「夫婦同姓は日本の伝統だ」と言うので「いや、伝統じゃないですよ。今、説明したとおり、1898 年までは日本はずっと別姓だったのですよ。源頼朝の奥さんは北条政子だったし、足利義政の奥さんは日野富子でずっと姓は変わらなくて、ずっとそうだったのですよ」と言ったら、「いや、夫婦同姓は昔から日本の伝統だった」、「いや、そうじゃないです」と言って、何か本当に水かけ論で困ったことがあります。

というように、だから日本は社会学がなかなか根づかない。社会学の地位が、ほかの国に比べればずっと低いのも、とにかく人に文句を言われることをよそうという行動、―これも社会学の一つのテーマですが―、違ったライフスタイルの人と一緒にやっていくのは嫌だとか、違った考え方の人と一緒にいるのは嫌だという意識が強いので、ついつい、いろいろなライフスタイルの人がいて、みんな幸せに生きてます、ということを認めるのが嫌だというところから来ているのかもしれないと思いました。

そうでなくても、先ほど審議会等でいろいろやってきていると言いましたけれども、本当に社会学は何かと思っている人もまだまだ多いですよね。せっかく、菅新首相が「第 3 の道」と言ってくれたのに、「第 3 の道 (the Third Way)」と最初に言ったのは社会学者（英国の社会学者アンソニー・ギデンズ）なのですよ、と大きな声で言ってくれる人がいないので、私などは機会があったらそれをどんどん言おうと思っています。それが一つです。そういうイデオロギストもそうですが、私も社会調査をしているなかで、人間は将来の姿をなかなか見たくないのだなというふうに、思うことが多くあります。自らをだます。よく学生に「言わないでくれ」と言われるのです。私、結婚の話に関連して「結婚を選ぶか、人を選ぶかどっちかなんだぞ。結婚を選ぶのだったら人は選べない。人を選ぶのだったら結婚は選べない」と言いましたら、学生から後で、「これから結婚する私たちの夢を壊さないでください。必ず、自分にだけは素敵な人が現われて、それで幸せな結婚ができると信じているのですから」と言われたこともあります。

もしかしたら、日本はだまされたがっている、人にはだまされる幸せというのがあるのかもしれない、と常々思います。永遠にだま

すことができれば、死ぬまでだまされるのだったらそれでもいいのでしょうけども。ただ、長寿社会になってきましたから、死ぬまでだまされるとは、なかなか思えなくなっている。一生だまされるという状況ではなくなっているかもしれません。

私、フリーターの調査をしていたときに、いろいろな例に出会いました。仕事でもそうです。仕事の面でも、30歳ぐらいの、もちろん親と同居しているフリーターの人と会って話をしていて、ロックバンドで、その道のプロを目指しながらフリーターをやっている。CDを出したとか聞いたのですけれども、はっきり言って、私は理解できませんでした。年に数回ライブをやれば、小さい会場ぐらいは埋まるのだけれども、もちろんそれで食べてはいけないから、事務のバイトをしていますという、そういう人と会いました。「10年後、どうしてますか？」と聞いたら、「いや、ロックで売れてたら、それで活躍してると思う」と言うので、「じゃあ、売れてなかったらどうするか？」と聞くしかなかったので、そのように聞いたら、突然、「いや、死んでます」とか答えて、「えっ？！」という顔を私がしたら、向こうが気を遣ってくれて、「いえいえ、このままだと思います」と逆に気を遣ってくれたのですけれども。

結婚に関してもそうで、大体、女性のフリーターは、大体というか、私がインタビューした女性の95％ぐらいは、いわゆる将来、収入の高い人が現われてくれて、それで結婚をして、幸せな家庭を築くという夢を語るのです。10年ぐらい前に、30歳ぐらいの非正規雇用の女性をインタビューしました。もちろん、親と同居しています。そのときに、「将来はどうなのですか？」と聞いたら、絵を描いたように「結婚して、子どもを育てて、子どもを育て終わったら趣味の活動をして、夫婦で仲よく暮らしたいと思います」と、ニコニコ答えるのです。私、別に意地悪でも何でもないのですが、「じゃあ、結婚なさらなかったらどうするのですか？」と聞いちゃったのです。聞いたら、私、初めてフリーズというものに出会いました。つまり、口をあわあわさせて、もうなにか放心状態になる相手がいたので、私は慌てて追い打ちをかけてしまって、「済みません、婚約者いらっしゃるのですか？」と聞いてしまって、「じゃあ、彼氏は、つき合っていらっしゃる人は？」と言ったら、大丈夫かなこの人は、という気持ちになってしまいました。

少なくとも10年前の時点では、30歳前後で未婚の女性が将来結婚する確率は10％とか、そんな確率だったのです。今年の国勢調査で、今はまた数字が変わっているかもしれませんが。

大丈夫かな。つまり、結婚できなかったときのことを、何にも考えてない。何にも考えてないし、では結婚について積極的に活動しているかというと、全く活動してないわけで

す。だから、私、「婚活」ということを推奨するようになったのです。

確かにそうですね。20 歳半ばぐらいのフリーターの人をインタビューしたときに、これは東京でしたけれども、「将来は？」と聞いてみました。その人は、大学を卒業しているのにあえてフリーターになった人です。理科系の大学を卒業している女性だったので、就職口は引く手あまただったらしいのですが、それをけってフリーターになった。「じゃあ、どうして？」と聞いてみたら「私、夏休みの間 2 カ月、ドイツに毎年行くのが癖になっちゃって。就職したらできないでしょう。だから、10 カ月派遣で働いて、2 カ月ドイツに行ってる」。「お金はどうするの？」と聞いたら、「お父さんとか言って肩に手を当てると、お小遣いくれる」と。「いいな」と言ったらいけないので、「大丈夫、将来は？」と言ったら、「つき合っている彼氏がいるのだけれども、彼氏は共働きをしたいと言っているけれども、私は共働きで家事も押しつけられるの嫌だから結婚は断ってる」と言いました。「でも、彼だって今のご時世だから、収入が上がって共働きしなくてもいい収入になるとは限らないよね」と私が言うと、彼女は「そうなんですよ、山田先生。だから、私、派遣会社に頼んで、一流会社に派遣してもらって、収入の高い男性を見つけようと頑張ってるんですよ」と。ああ、この人は大丈夫だなと思いましたね。

社会学者で、社会学の世界で「第 3 の道」を唱えたアンソニー・ギデンスが「個人的なこと」についても言っていて、常に「反実仮想」しなさいと言います。

反実仮想、つまり、こういうふうな道になればいいのだけれども、ならなかったときのことについても手当をしておけよ、というのが反実仮想です。でも、今例に挙げたように、反実仮想をしている人もいる。社会学を学ばなくても反実仮想ができる人もいれば、反実仮想せずに、きっと収入の高い男性が来てくれて、私をパラサイト状態から専業主婦状態にしてくれるはずだ、と信じて疑わない人もいるわけです。

これは最近ですけれども、私が直接取材したわけではないのですが、あるテレビ番組があったときに、月収 6 万円で 40 歳の男性が婚活しているけれども、なかなか結婚できない。そのことを取り上げたテレビ番組、ドキュメンタリーというかニュース番組がありまして、私も協力したのです。NHK のディレクターの人が、月 6 万円の収入で婚活して、そこまでは直接は言いませんけれども「この収入で結婚できる

と思いますか？」と聞いたら、彼は何て答えたかというと「愛があれば」と言うのですね。愛があれば、月収6万円でも嫁さんが来てくれるはずだ。だから、僕を好きになってくれる人に出会うために、何度も何度もお見合い、お見合いというか、パーティーとかに出ているのだと。愛があれば一緒に苦労してくれるどころじゃないですよ、おれを好きになって愛してくれれば、老いた親の面倒を見てくれるはずだ。6万円でも頑張ってくれるはずだ、と信じて疑わない。それは、可能性はゼロではないけれども……。だから、我々、可能性がゼロではないことに対して、何て言えばいいのかというのは、教師としてもかなりつらい時代に入ってきたのではないかなと思っています。

ある授業で「女性はどういう人と結婚したがっているか」という調査をして出てくる結果は次の4点だ、という話をしました。収入が高くて、最近は高いというより安定しているといいますけれども、収入が高くて、家事好き、家事を手伝ってくれる男性で、ハンサムで、現代的ですけれども、浮気をしない人。大体、この四つが出てくるのです、未婚女性にアンケートをすると。

講義のなかで、そういう人はまず論理的に存在し得ないという話を私はするわけです。「大体、若くて収入が高い人は、忙しくて家事を手伝ってくれる余裕はない。フリーターは家事を手伝ってくれるかもしれないけど、収入はない。大体、収入が高くて、家事を手伝うほど暇があってハンサムな人が浮気しないわけがないだろう」と言うと、学生たちは「うん、うん」とか言うのですけれども。その授業が終わった後、ある女子学生が私のところに近づいてきて、「先生、社会学って例外がある学問だって言いましたよね。つまり決まっているわけじゃなくて、こうこうこういう人もいれば、それに合わない人もいるよ、と先生おっしゃいましたよね」と言うので、「うん、言ったよ」と答えました。すると「じゃあ、収入が高くて、家事手伝ってくれてハンサムで浮気しない人っていますよね」ときた。私は、ちょっと考えて「それはいるよ。いるけど、そういう徳の高い人は、徳の高い人同士で結婚するわけであって、あんたみたいな人を選ばないんだよ」と言ったら、さらに食い込まれて「先生、それにも例外がありますよね。そういう徳の高い人が私を好きになってくれることもありますよね」。そりゃ確率ゼロではないですからね、それは、可能性はあるとしか言えないですけれども。彼女がその後、そういう人とつき合えたかどうかよくわからないですけど。というように、反実仮想せずに、多分こうなるだろうという夢を持っている人が多くて、私のような社会学者はそれを壊してしまう。

7年前の東京の調査で、25歳から34歳までの未婚男性で年収600万円以上は3.5％だという調査をいろいろなところで述べていた

ら、あるとき、森三中がバラエティー番組で歌にしたというのです。どういう歌かというと「東京で 600 万円以上 3.5%、だから早くしないといなくなっちゃうぞ」。ああ、なるほど、世間ではそういうふうにとらえるのかと思いました。これは後で言いますけれども、つまり個人的問題と公的問題を多くの人々は分けて考えたがっていて、とにかく個人的に解決できればそれでいいや、かつ、私だけは個人的に解決できるに違いない、と思っている人が結構多いということがよくわかりました。

また例を出すと、ある 35 歳ぐらいの未婚女性、フリーターの未婚女性の人が、とにかく年収何百万円以上じゃないと、といろいろ条件つけて、私が「そういう人と出会う可能性はどれぐらいあると思いますか？」と聞いたら、いきなり「私は今までくじに当たったことがない」ときたんです。「私は今までくじに当たったことはないから、男性だけは当たるだろうと信じている」と言うのです。まあ、信じているのだったらいいですけどね、ということなのでしょう。でも、そうやって夢を見ている人がだんだん多くなってきたときにどうなるのかというのも、社会学は研究しなければならないのですが、 あまりいいような状況ではなさそうな気がします。

次に、社会学というのは願望、いわゆる自分の願望どおりにいかないものであるということを明らかにするのですが、多くの人は、きっと自分が望んだとおりになるはずだという夢を見るか、婚活のようにその夢を、構想として見ればほとんどの人が失敗するのだけれども、その夢を見ながら、夢のために一生懸命やるということになってしまう。そのことが見えてくるわけです。

今度は、次に理想主義者との対決に行きたいと思います。一番最後に付けた資料で、これは武川正吾東大教授の、たまたま福祉社会学会の会長講演を引用させて頂いてます。有名な C ライト・ミルズの「社会学的な想像力（sociological imagination）」ということを引きながら、社会学の役割を述べた、私はいい会長講演だったと思っています。

やはり、個人的な問題（troubles）と社会的な問題（issues）がいかに結びついているかを想像するのが社会学の役割だということをミルズが言いましたし、アンソニー・ギデンズも何度も何度も強調しています。私も、これが最も大きな社会学の課題だと思っています。逆に言えば、構造的な問題を解決しなくて、表面的に、個人的に問題が解決できると考えるのが理想主義者だと、悪い意味での理想主義者だと思っています。

配布資料のその前のページで塩野七生さんの、これは「海の都の物語」から引いてきているのですが、現実主義者は嫌われるという文章ですね。現実主義者は憎まれる、なぜかというと、理想主義者の穴を見つけてしまうからだと。

多分、私は幾つもの、ここ10年ぐらいの間、政府系の審議会とかそういうところに行っていろいろ発言してきましたが、本当に社会学的思考が欠けている理想主義者の発言がいかに多いことか。結局、私がそこに呼ばれた理由は、さすがに官僚の人たちはわかり始めている。社会に責任を持たざるを得ない官僚の人たちはわかり始めている。でも、官僚の人たちが理想主義者の人をけしからんと言うと角が立つので、かわりに私を呼んできて、私に言わせているのだなということを、最近ひしひしと感じるようになりました。

ある審議会で、フリーターが増えて非正規雇用者が増えているというときに、ある企業の経営者の人が「就職できないのだったら自分で起業すればいいではないか」と言ったわけです。それで、起業資金貸付制度が実際できてしまったのです。どうなったかというと、だって正社員になりたくてもなれないということは、企業のほうからおまえは要らない、ノーと言われた人たちですよ。別にそうじゃない人もいるかもしれませんが、大体そういう人たちです。そういう人たちに、「じゃあ、お金やるから商売やれ」と言ったって、成功するわけがないではないか、とだれが考えても思うのですけれども。理想主義者の人は「いや、別のところに能力があるかもしれないから起業させればいいだろう」と言うのです。私、ある県で、その起業資金貸付の担当者に会って話を聞いたら、フリーターがそうやって貸付金をもらって商売を始めても、1年以内に9割は潰れるそうです。それはそうですよ。だって、起業に関する専門知識とか人脈とか商売のノウハウとか経理の知識とか、そういうものがあって初めて起業して何とか成功できるわけでしょう。そういうものが全く欠けている。起業できるほどの人間であれば、就職したいと言えば、企業もほっとかず採るわけです。

結局どうなったかと言うと、起業支援金を貸し付けて商売を始めた人の9割方は、リサイクルショップをやるそうです。つまり、お金が100万円とか200万円とか貸し付けがあるので、空き店舗を借りて、そこに古道具を置いてリサイクルショップをやるそうです。ですが、今リサイクルショップは山のようにあるわけだし、幾らで仕入れてきて、どういうものを仕入れて、どういうふうに売っていったらいいのかというノウハウは全くないわけですから。そうした知識やノウハウがないので、貸付金は運転資金に困って1年以内に9割ぐらいが倒産してしまう、という現実があるわけです。そんなの別に、実際にやらなくても、少し頭で考えればわかるのですが、現実にそうなる。理想主義者は「起業で成功した人もいる。ホリエモンを見よ」とか言うわけです。ホリエモンのような人が一人いるからといって、ほかの人が全部成功するともかぎらないということが、なかなか見えてこないのですね。

だから、理想主義者は、「これが実現しないのはこれが悪いからだと、こういうふうにすればいい」と言うのですが、結局、個々の問題だけを見てそれを解決しようと思っても、その裏側にある社会構造の問題を解決しなければ、根本的に、そのこと自体が全然解決策にならないということが、なかなか理解されない。だから、C ライト・ミルズがもう 50 年以上前に言っていることを、なかなか受け入れられないのだなと思ってしまうのが、この頃でございます。

だって、フリーターだってそうですよ。僕、フリーター対策のための委員会みたいなのにも呼ばれて言うのですが、例えば文部科学省は、フリーターにならないための教育をすればいい、と主張する。つまり、これはフリーターになりたいからなっているという前提です。でも、現実はそうではないわけですから。就職先がなかったり、うまくいかなかったりして転落してしまって、もう二度と正社員になれないから仕方なくフリーターをやっているし、夢を見ながらやるしかない。そうした状況に対して文部科学省は「フリーターにならないように教育をする、している」と言うのですけど。そこで「結局、学校を出たときの出口がちゃんと保障されてないかぎり、幾らなりたくてもなってしまうし、もし「なりたくない」と言えばならないのだったら問題は起きないのではないですか？」と私が言っても、「いや、そういう職業教育をするのだ」というふうにして、終わってしまいます。まあ、言いっ放しですよ、そうやっていればいいのですけど。

大体、フリーターというか非正規雇用者をなくすことができるかといったら、それは無理でしょう。これだけファスト・フード店が増え、コンビニが増え、オートメーション化が起こり、IT 化が進んでいるのですから。かつサービス化が進んで、グローバル化が起って、つまり社会の構造変動が非正規雇用労働を増やしている。でも、そちらのほうを見ないで、ただ非正規雇用はけしからんから規制すればなくなるだろう、と唱えている。そうなると、どうなるかと言うと、ある卒業生、ある企業機関に勤める卒業生と会って話をしたら、物をつくる商売と違って、サービス業は必ずピークとオフがあると言います。つまり、忙しいとき（ピーク）には人手は足りないし、暇な時期（オフ）もある。そういうピーク時期に、忙しいときの需要を賄うために派遣社員とかを雇っていたと。でも、そろそろ規制がかかりそうなので、派遣社員をやめたそうです。「ではどうなったの、正社員は増えたの？」と聞いたら、「先生、増えませんよ」と答える。結局、ピークのときに正社員を残業させることによって賄おうとしている。だから、本当は自分たちがやらなくてもいいような、派遣社員に任せればいいような雑務も、結局、自分たちがやらなくちゃいけなくなってしまったみたいな話を、その

卒業生はしていました。

つまり、だれが、フリーターがやっている仕事をするかということをセットで考えなければ、つまり非正規労働がなくなれば、非正規労働を規制してなくしてしまえば非正規労働がなくなるわけではなくて、それはファスト・フード店でハンバーガーを売る人も「ハンバーガー要りませんか、ポテト要りませんか」という人も必要であれば、需要があるときだけ働く掃除のおばさん、掃除のおじさんでもいいですけど、掃除の人も必要であるわけですし、ピークのときだけ働く期間労働者も必要なわけです。そういう仕事をだれがやるかという問題とセットにしなければ、「フリーターはけしからん、なくなれ！」といったって、現実にはなかなかなくならないという話を、私はいろいろなところでするのですが、そこを部分的にしか見ないようにしていて、それに同調しない人を非難するために主張しているようにしか見えない。社会学者＝リアリストにとっては、そう見えてしまうのです。

そうした気持ちはわかります。理想主義にすがりたいという気持ちはわかります。すべての人は卒業したら正社員になって、どこにもフリーターがいないような社会になればいいな、と思うときはあります。ですが、では現実にそれで社会が回るかと言ったら回らないから、それは絵にかいた餅ではないか、と思ってしまうのです。

特に家族と地域というのは、理想主義者にとっての2大理想郷です。何かあると「それは家族に任せればいい」とか、何かあると「地域で解決します」と言われる。地域を全く見てないわけですよ。今、移動がどんどんできるようになって、地域社会でも格差がどんどん生まれています。やっぱり、高齢化率が5割6割のところで、地域で助け合いと言ったって、助けてもらいたい人ばかりが住んでいる地域がいっぱいある。

一方で、私の友達の先生が、東京の高級住宅マンションに住んでいるのですけれど、そこでは、地域活動がすごく盛んで、ボランティア活動もすごく盛んにやっているそうです。「何やってるの？」と聞くと、「うちの子どもは、海外赴任経験をした人の奥さんのところで無料で英語を習っている」と言うのです。つまり、高収入の人同士の、だからアメリカだったらゲーテッド・コミュニティになるのでしょうけれども、日本は高級マンション地区一棟が高級コミュニティみたいになってしまって、金持ち同士の人が、お金持ち同士の間で助け合いをやっているという層ができてしまっているわけです。だから、そういう現実を見れば、何かあったら地域の助け合いで解決しましょうなどと、なかなか言えないはずなのですが。

結婚なんていうのは大変です。いろんな地区の自治体の人を集めて、結婚対策をやったときも大変でした。良い方の事例は話してい

いと思いますけど、例えば高山市の活動では、高山祭とかそういうのを活かして出会いの場をつくって、それで何組も成功しました、という発表をした。その後に、ある村の担当者が「うちには何とか祭とか、全国的に有名な祭はない。そういうときにどうしたらいいのですか？」と尋ねたら、高山市の担当者は困ってしまって、「いや、知られていないけど、いいものはあるんじゃないですか。それを発掘してやりましょう」とか言うのですが。それは、そこからやらなければならないというか、その必要が本当にあるのかな、という疑問があるわけです。

というように、家族社会学をやっていると、家族や地域について何か壊れているとか言うと、それはけしからんというふうになってしまうのも現状でございます。

最後に、リアリスト社会学者について。私は社会学者である以上は、リアリストだと思っています。リアリスト社会学者は何をしなければいけないのかと考えますと、決して現実と妥協せよ、理想をあきらめよと言っているわけではない。理想主義者を批判するけども、理想を持つなと言っているわけではない。現実を見たうえで最善の道をとれ。いろんな個人的な問題に関しても、それは個人がおかれた事情や状況はさまざまですが、そこに社会的な連関や、社会的な、構造的な問題が現われてきているということを明らかにしたうえで、最善の道をとらなければいけないと思っています。

霜山徳爾さんからの孫引きなのですが、ユングという人が心理臨床、―これも誤解が多い学問ですが―、に取り組みました。

私、学芸大にいたときに、「心理臨床に行きたいのです」とか「カウンセラーになりたいです」と言う学生もいたのですが、「やめとき、やめとき」と言いました。「人が苦しんでいる話を朝から晩まで聞くんだよ、それに耐えられる、君？」と言ってあきらめさせることも多かったです。よほどの強靱な精神がないと、心理臨床はできない。心理臨床の学生を教えたこともあるのですが、「何で心理臨床に来たのですか？」と聞いたら、「私が癒されたいから。心理臨床を学べば、癒される方法を学べれば、私自身が癒されるかもしれない」と答えるので、「それはやめとき、やめとき」と言っているのですけれども。

ユングは、心理臨床を行えば、それで何か気分がよくなって、いい気持ちにさせられるようなものを人は心理臨床だと思うかもしれないけど、実際はそうではない、と言いました。ユングが言うように、心理臨床の目的は、患者をあり得ない幸せな状態にするのではなくて、苦しみに耐える力を身につけさせることにある。それをもじりまして、私は家族社会学者ですので「家族社会学の目的は、（理想主義者のように）人や社会をあり得ない幸せな状態にするのを約束するのではなく、社会学的運命に負けない強さを身につけさせる

ことにある」と書きましたけれども、社会学の目的も一緒だと思います。

社会学の目的というのは、理想主義者の言うように、人や社会をあり得ない幸せの状態にするのを約束するのではなく、社会学的運命に負けない強さを身につけさせることにある、個人的に言えばそうですね。

社会的に言えば、何かこれをこうすれば、こんなに社会が理想的になるよということを言うのではなくて、今、社会にはいろいろな問題があって、それは複雑な構造的な要因によって起きている。だから、それをすべて連関させて、現実を切り開かなくてはならないよ。そうしたことをやることが、社会学の目的だと私は思っています。

取りとめない話が続きましたが時間になりましたので、これで私の話を終わらせていただきたいと思います。

どうも、ご清聴ありがとうございました。

▶司会　山田先生、本当にありがとうございました。

それでは、フロアのほうからの質問を受けて、質疑応答の機会を持ちたいと思います。

では、どなたからでもどうぞ。

▶質問者 A　関西学院大学の倉島哲と申します。大変おもしろいお話、ありがとうございます。

お話の中で、リアリストと理想主義者の二抗対立という形でお話しされていて、とてもおもしろかったです。

理想主義者のなかでも、私だけは大丈夫、私だけは 3 高の彼氏を見つけて結婚できると考える、そういう全体的なものと個人的なものをきっぱり分けて考えてしまう傾向と、それと例えば、何かそのような種類のリアリストと理想主義者と、あともう一つ違う理想主義者についても言及されていたと思うのです。

というのは、例えば現実を見ないで理想を語るとか、何だかそのコミュニティはこうあるべきで、本当はこうだというふうに観念で物事を判断しているような理想主義者ですね。理想主義者でも、何かいろいろな種類があるような気がするのですが、そのあたりについてはどうお考えでしょうか。

▶山田　そうだと思います。

個人のことに関して言えば、理想主義者というよりも、夢を見る人というふうに言ったほうがいいのかなと思っています。私だって夢を見ますからね、多分。私だって夢を見ますからねというのは変な話ですが。こうこうこうなって、こうなればいいなという夢は見ます。

でも、リアリスト的な側面だと、こうなる確率は何％だけれども、まあまあ、あるかもしれないけれども、ないときも考えて、こうしておこうと考える。リアリスト的に振る舞

うというのは、多分、個人的な理想主義者とリアリストの差だと思います。

社会の問題について言及して対処する場合は、やはりこの塩野七生さんが言ったように、いわゆる悪い意味での理想主義者とリアリストとの違いが重要です。そこでのリアリストとは、現実主義者的な思考を持って社会に対して発言していく場合の立場だと思います。だから種類というよりも、立場の違いによってこの二つの対立が、異論が出てくるのではないかと思います。

▶司会　では、次の方。

▶質問者 B　一般の市民の者です。

婚活に絡んで、最近の 3 高の変化ということがよく言われているらしい。いわゆる高学歴・高収入・高身長から、価値観とか金銭感覚とか雇用形態の安定とかが、言われております。この三つの場合でも、先ほど先生がおっしゃった四つのことと同じように、一般の若い男女にとっては相入れないことになるのでしょうか、これなら相入れることになるのでしょうか。

▶山田　難しいお話ですけれども、結局、20 年前だったら当たり前だったことが、今は当たり前でなくなっているという意味で、構造的には一緒だと思います。

つまり、雇用形態について言えば、20 年前だったら、未婚の若年男性の、学生を除く未婚男性の 90％以上は、雇用形態は正社員でした。今は、学生を除く未婚の男性で雇用形態が正社員という人は、70％ぐらいまで落ちています。だから、そういう新たな 3 高が出てきたのも、今の若い人の状態がだんだんよくなくなってきたので、せめて昔の基準であればという意味で、そういう形で出てきたのだと思います。つまり、構造的にはそんなに変わらないと思います。

▶司会　では、次の方。

▶質問者 C　社会学部の教員をしております鈴木です。よろしくお願いします。

二つ質問をさせてください。社会学者がリアリストとしてどのように社会に立ち向かうかというお話は、大変興味深く、また個人的にも共感するところの多い、勇気づけられる話でしたが、今日は社会学部の 50 周年記念の講演会ということもあるので、社会学教育についても少し伺ってみたいと思います。

かねてから、私は社会学部を出てしまうと、個人的には不幸になるのではないかと思っています。例えば、こういうことです。好きな女の子がいて、結婚しましょうと言っている。しかし、彼女の望みをよくよく聞いてみると、非常に高い望みを持っている。いやいや、でも、今 40 代、50 代のピーク年収は毎年下がっていて、君と僕が中年になるころには非常に

収入も厳しい状態になっているから、共働きをしてもらわないと無理だよと説明をする。すると、恐らく彼女は、まあ何て甲斐性のない人だと思うと思うのですね。

あるいは、社会学部というのは統計をきっちり学びます。統計をきっちり学ぶと、いろんな操作をしてはいけない、インチキをしてはいけない、と学ぶわけです。ですが、会社に入ると、うちの商品が売れるように、データを少し誇張してグラフをつくれと言われるぐらいならまだしも、強い上司がいて「おれが白だと言えば、カラスも白だ」と言われてしまうと、データでこうなっていますよ、と幾ら言っても聞いてもらえない。学校でこうするべきだと習ったことが、現実に直面したときに、どう使っていいのかわからない。まさに、講演で言われていた理想主義者というか、ある意味現実を見ない人たちにぶつかって、知識が、せっかく社会学で学んだ知識が役に立てられないという状況に直面してしまう。そうしたときに、こんなこと勉強しなければよかったのに、と思われてしまったらどうしようと思うことがたまにあります。

こうした学生たちに対して、どういうことをリアリストとして言っていけばいいのか、山田先生はどのようなお考えをお持ちなのか、というのが1点目。

2点目は、語り口の問題です。私も最近、政府の審議会等になぜか呼ばれることが多くなって、政権交代のせいだと思うのですが。そこに呼ばれると、何か話をしなければいけない。

あるとき、たまたま有名な教育社会学の先生と一緒に官僚の前で話をする機会を得ました。そのときに、その先生と私の使ったデータはほぼ同じデータで、そして同じ理論を使って説明をしました。グローバル化であるとか、非正規雇用の増大であるとか、そういう話をしたのです。私が先にしゃべって、その先生が後にしゃべられたのですが。その先生は、こんなに若い人たちはひどい状況におかれているのです、こんなに現実は厳しいのですということを非常に熱っぽくおっしゃると、官僚の方々は若干引きぎみになって、半笑い状態で聞いている。私が同じデータを使ってしゃべって、こういうかたちでこういうやり方をすると希望が見えるかもしれませんという、ある意味、山田先生の立場からすると、理想主義に近いような結論を少し盛り込んで話をすると、ふむふむと身を乗り出して聞いてくるということがありました。

確かに、リアリズムというのは大事だと思いますが、そのリアルな現実を突きつければ突きつけるほど、政策にかかわるような現場であっても話を聞いてもらえない。となると、何らかの希望が見えるような結論は必要になるのではないかと思うのですが、そのあたりについては、山田先生はどのようにお考えなのかということをお聞かせいただければと思います。

▶山田　前者については、これは簡単な話で、知らないよりも知っているほうがいいだろう、と。つまり、うそをつくというのも何ですけれども、言わないでおくというのも、リアリストの一つの能力だと思っています。

私、恋愛の話をよく引くのです。社会学を学んだら、社会学を学んだ人同士としかつき合えなくなるみたいな話をされる人もいるのですが。そうではなく、うまく夢を見させることもできる、あえて言わなくて、知っていても。私、上野千鶴子さんから「山田さんほどのリアリストはいない」と言われてしまいましたが、そこも含めてリアリストになれるのではないかと思っています。

間違ったデータがあったときに、それを間違っていると直接言うのか、いや、私だったら何て言うのかわかりませんけれども。そうですけれども、「これでこういうふうになって、ええ、そう言ってることはそうなんですけれども、ここでこうやって文句を言われるかもしれませんから」とうまく上司をおだてながら、せめて間違いのない方向に多少持って行くのも、私はリアリストに求められていることだと思っています。

ちなみにですね、私のゼミの学生が、今年、ある県の公務員試験を受けたときに、最後の適性試験で最後の 10 問に、こういう質問があったそうです。「あなたは異性を見るとむらむらすることがありますか」、「あなたは夜一人でアダルトビデオを見ることがありますか」とか、そういう質問が 10 個あった。ちゃんと社会学を学んでいる彼は、この出題をした人はどういう意図でつくっているのだろうというところまで、リアリスト的に考えることができるわけです。別に社会学を学んだからそうなのか、たまたまその人がそうなのかはわかりませんが。「どうした？」と聞いたら、「まあ、全部バツつけるとうそっぽいので、まあ、当たりさわりのなさそうなところを一つだけ丸をつけて、あとは本当はうそかわかりませんけれども、バツをつけました」と言っていました。つまり、そこまでリアリストを徹底すればうまくいくのではないか、と思います。だから、私は知らないでいるよりは、知っていてあえて使わない、あえて言わないことも、一つのリアリストのあり方だと思っています。

政策提言とかそういう政策の場になりますと、やはり現実をすべてこうこう、だめだというだけではだめで、やはりそこはうそじゃいけないと思いますが、ここらあたりを直したら、このぐらいになるのではないですか、みたいなところまで考えて言ったほうがいいと思います。私も、それは心がけているのですけれども。ついつい、私も批判だけの批判に終わってしまうこともあるので反省しています。鈴木先生の態度はとても立派だと思うので、私もそうありたいと思います。

▶質問者 D　関西学院大学社会学部の教員

の陳と申しますけれども。

私は、家族は社会の一番小さい、ベーシックの細胞という視点から、先生に質問させていただきたいと思います。

まず、婚活のことについて、資本主義の市場マーケットがあるかぎり、階層と階級と格差があるかぎりは、先ほどの愛情をとるか、人をとるか、家族をとるかという現象はとても避けられないと思います。先生の個人の価値観として、今、日本社会での婚活は、今後の家族は、社会の基本的な細胞という視点から、これからの日本社会の変化に対して、どのような影響があると考えておられるのか。そこのところを聞かせていただきたいと思います。

▶質問者 E　個人的な問題と構造的な問題を分けて考えているという話がありましたが、夢が壊れてしまったときに、人は自分自身ではなくて、そういう構造的な問題であったり、社会の問題のせいにするような気がします。最初に言われていたように、人はだまされたがっていると言われていたのですが、そもそも、どこかではきっと見えているのではないかと思うのですけれども。見えているけれども、見えなくするものというのは何なのか。見えているけれども見えなくさせるものというのは、そもそも何なのかということを、山田先生にお聞きしたいと思います。

▶山田　婚活に関しては、中立的な立場と、私の思う立場と価値観は多少違ってきます。私は人間にとって、いろんなところで述べていますが、『「婚活」時代』（2008 年、ディスカヴァー・トゥエンティワン）の最初でも述べていますが、人間にとって必要なのは、ジークムント・フロイトの言葉を引用しまして、「働くことと愛することが、人にとって基本的にうまくできなければいけないことの二つである」という立場から、一番手っ取り早いのは結婚して子どもをつくることだろうというふうに思います。別に、結婚に限ったことではないのですが、やはり人間にとって自分を大切に思い、自分を必要としてくれる存在が何らかのかたちで必要だということは考えています。それが、別に家族ではなくてもいいけれども、家族でありたいと思う人が多いから婚活する人が多いのだと思います。ただ、それがうまく成功するかどうかは、今までどおりのやり方で成功するかどうかは、別問題です。

あと、香山リカさんからの批判で、婚活はいいけれども、結婚した後、幸せかどうかと

いうのは、結婚してどうなるかということを考えないで結婚するのは問題ではないか、といった指摘もありました。私は、結婚して幸せになるという話は、どこにも書いておりません。多分、結婚しなくても幸せな人は結婚しても幸せで、結婚すれば幸せになると思っているけれども、今は不幸だと思っている人は、多分、結婚しても不幸なのではないか、と私は個人的には思っています。

個人の夢をどうやって処理するか。処理というか、どういうふうに対応したらいいかというのは、今の日本社会の一番大きな問題になってきているかなと思います。

私が『希望格差社会』で引用したエッセという社会心理学者は、夢が壊れて絶望、いわゆる despair ですね、その despair にも機能があると述べています。いったん夢が壊れて非現実だとわかった途端に、いったん despair が起こった後で、少なくとも、アメリカだから高度成長ではないか。

アメリカだったら 1980 年ぐらいまでは、次の目標に切りかえられて別の夢が出てきた。この夢がだめだったら次の夢にいくというふうに、現実的な夢の選択肢がいろいろあったから、うまくいった。しかし、今起きているのは、過剰な夢と過剰な絶望、つまりロックスターになって大金持ちになるとか、年収 2,000 万円以上の男性をつかまえてセレブになるといった、実現可能性が低い夢にどんどん引っ張られていくか、いったんそれがだめになったら、もう次の夢に切りかえられずに、そのままうつになってしまうかどっちかだというような話をしています。私は、そのどちらも裏では一緒だというかたちで、『希望格差社会』を書かせていただきました。

だから、現実を見ると、やはり見ると暗くなるから見ないようにするというのは、2000 年前のローマ時代から同じだったと思います。それまでは、システムに乗っていれば、別に見ようが見まいが変わらなかったのが、今はシステムが保障してくれずにすべて自分でやって自分の責任とされるから、さらにそのせいで見ないようにするという圧力がかかって、それがまた将来、破綻を引き起こすようになるのかな、と思っております。これは、私の感想です。

▶司会　どうも、ありがとうございます。

では時間になりましたので、今日の講演会を終えたいと思います。

最後になりましたが、本日は天気が悪いなか山田先生には東京よりお越しいただき、本当にどうもありがとうございました。